

# 無生物主語が「歩く (walk)」とき —生成 AI を利用した境界的事例における動詞意味論へのアプローチ

鈴木 亨  
(文化システムプログラム)

## 1. はじめに

英語には、laugh, talk, walk など典型的に有生主語 (animate subject) をとる動詞がある。これらの動詞は人間の身体特性に基づく活動を表すものであり、主語として人が選好されるのは当然であるともいえる。しかし、人間の言語使用では、詩的・文学的領域に限らず、一見逸脱的ではあるが比喩的理解に基づく創造的な表現が生み出されうることよく知られている。ただし、言語学的関心から特定のタイプの創造的表現をピンポイントで見つけるのはそれほど簡単ではなく、コーパス調査を駆使しても、現実的には直感に頼りつつ、偶然の出会いを待つしかないという一面があるのも確かである。

本稿は、生成 AI を利用して動詞意味論における逸脱と創造の境界的事例を探索し、その成立背景を分析する一つの試みである。具体的には、動詞 walk に関して、通常の有生主語ではなく、無生物主語 (inanimate subject) との組み合わせに注目し、一見逸脱的に見える表現が創造的事例として受容される条件について考察する。2節では、動詞 walk の一般的な意味論を概観し、その用法において人間の身体活動の特性に根差した強い意味制約があることを見る。3節では、生成 AI による無生物主語と動詞 walk を組み合わせた作例をもとに、Google 検索によって類例の使用実態を調べる。そこでは、世界知識に基づく換喩や擬人法による単純な理解が及びにくいと思われる2件の稀な事例において、脚 (legs) の描写が加えられるという共通点があることを指摘し、その意味論的必然性について論じる。4節では、無生物

主語と動詞 walk の組み合わせから2つの興味深いパターンを取り上げ、そのうちの1つは、状況に対する否定的評価を自嘲的ユーモアで表現するという構文イデオムの特性を備えている可能性を示唆する。5節では、まとめとして、生成 AI を活用した意味論上の境界的事例の「開拓」が言語研究にもたらす可能性について論じる。

## 2. 動詞 walk の意味指定

動詞 walk の使用には比較的強い語彙的意味制約があることが、Ritter and Rosen (1996) による語彙的意味と事象構造の関係を扱った研究において指摘されている。動詞 run と walk は、いずれも人間の移動様態を表す基本動詞であり、一見類似したタイプの動詞と思われるが、Ritter and Rosen は、それぞれの動詞の語彙的意味指定における強弱の違いが、文レベルで実現される項構造の選択や項の解釈に課される選択制限などに大きく影響していることを検証している。(1) と (2) の例は、run に許される多様な用法と意味解釈に対し、walk ではそれらが狭く制限されていることを示している (例文は、非文の判断を含め、いずれも Ritter and Rosen (1996: 39) による)。<sup>1</sup>

<sup>1</sup> 動詞 run と walk には自動詞用法に加えて、他動詞用法もある。前者は「事業の運営や経営；選挙への出馬；機械の操作」など他動詞としても意味的汎用性が高いが、後者の他動詞用法は、「人やペットを連れて歩く (歩かせる)；野球で打者を歩かせる」といった例にほぼ限定され、辞書の語義記載も自動詞用法に比べると非常に少ない。本稿では主に動詞 walk の自動詞用法を扱う。

- |  |   |
|--|---|
| <p>(1) a. Martha ran to the store. “dash”<br/>         b. Tears ran down the child’s face “flow”<br/>         c. Martha ran Fred to the station. “take”<br/>         d. Marth ran a successful campaign. “manage”<br/>         e. Fred knows how to run the fax machine. “operate”</p> <p>(2) a. Martha walked to the store. “go on foot”<br/>         b. *Tears walked down the child’s face.<br/>         c. Martha walked Fred to the station. “accompany on foot”<br/>         d. *Martha walked a successful campaign.<br/>         e. *Fred knows how to walk the fax machine.</p> | <p>(3) a. run efficient or continuous progression<br/>         (効率的または継続的な進行)<br/>         b. walk move with a walking gait<br/>         (徒歩による移動)<br/>         (Ritter and Rosen 1996: 44; 日本語訳は本稿執筆者)</p> |
|--|---|

(1) の例文は、動詞 run が自動詞用法から他動詞用法まで幅広く使用され、同時にパラフレーズ例からもわかるように、多様な意味解釈 (辞書であれば、語義記載) を持ちうることを示している。一方、(2) の例文は、動詞 walk には基本となる自動詞用法に加えて、他動詞用法もあるが、その意味解釈の範囲は限定的であり、語彙的意味として「徒歩での (脚を使った) 移動」がほぼ必須の条件として指定されていることを示唆している。Ritter and Rosen は、この 2 つの動詞の対比を、run の語彙的に指定された意味が弱い (抽象的かつ漠然としている) のに対し、walk の語彙的意味は強い (具体的かつ特定のである) という対比から導くことを提案し、それぞれの語彙的意味を、インフォーマルな記述ではあるが、次のように特徴づけている。<sup>2</sup>

このような対比からすると、動詞 run の場合は、効率よく継続した動きがあると認められるものであれば、主語 (自動詞用法)、もしくは目的語 (他動詞用法) の活動の描写として幅広く使用できるのに対し、動詞 walk の場合は、左右の脚を交互に適度な速さで動かす徒歩による移動の描写としてしか用いることができない。前者の場合、場面に応じて、人以外の多種多様なもの (機械、乗物、液体など流動性のある物質、噂などの情報、考えや感覚、出来事など) が描写対象として動く主体となり、具体物から抽象物までその範囲は非常に広い。自動詞として使われる動詞 run の主語として、有生主語 (animate subject) か無生物主語 (inanimate subject) かという区別も文脈に応じたものとなり、その選択に本質的な制約はないといえる。

一方、walk の場合、行為主体は必然的に、人もしくは人に類する脚を持ち、主体性がある程度認められる動物 (あるいはロボットなど) に限定されることになる。意味役割の観点からは、walk の主語が担うのは Agent (動作主) として特徴づけられる。<sup>3</sup> (2b) において、液体である涙 (tears) が walk の主語として認められないのは、

<sup>2</sup> Ritter and Rosen (1996) が論じる意味指定の強弱は、run と walk のような基本動詞間に見られるだけでなく、例えば、kill/murder/assassinate のような段階的に意味の範囲が限定されるような動詞間でも見られる。この中で kill は最も意味指定がゆるく、kill > murder > assassinate の順に、死に至らしめる目的 (意志性) や手段、対象の種類などに関して強い制限が課される。

<sup>3</sup> 意味役割としての Agent の位置づけには複数の考え方があり、Huddleston and Pullum (2002: 230-231) では、Causer (使役主) のサブタイプとして、Agent は「典型的に有生で、意識的かつ意志的な行為者」とされている。一方、Quirk et al. (1985: 743) では、agentive (いわゆる Agent に相当) と external causer (外的使役主) を区別し、後者を「意志・意図のない (一般に無生物の) 出来事の原因」と特徴づけている。本稿では、厳密な定義には立ち入らず、動詞 walk に関して、人を典型とする意志的な動作主 Agent の意味役割を持つ活動動詞という一般的な理解を前提とする。なお、意味役割に関する種々の理論の概観とその批判的検討としては、Levin and Rappaport Hovav (2005) を参照。

動作の主体性という観点から当然の成り行きである。

また、英語の基本動詞の用法について統語論・意味論の両面から詳細に記述した小西 (1980) には、動詞 walk について次のような概説がある (項目としての walk には 8 頁にわたる詳しい記載がある)。<sup>4</sup>

基本的に「人が足を動かして身体を移動させる」ことを表す。一般には、「歩く」場所や方向を示す副詞 (句) を伴って用いられる。「歩く」こと自体が目的となると「散歩する」の意味をもつ。また、「歩く」の意から発展的に、「(幽霊が) 出る」「(死んだ人が) さまよい歩く」とか「生活する」「世の中を渡る」の意を表す。これらでは「歩くこと」よりも、前者では死に対して「(生きているように) 動く」、後者では「ある道 [生活様式] にそって生きる」ことが示される。他動詞として、場所を表す語を目的語にとって「(場所を) 歩く」の用法が可能。この場合、「歩きまわる」とか「(その場所を) いつも歩く」のような含みをもつことがある。同じく、「人または動物を歩かせる」「連れて行く」意があるが、いずれも使役性が稀薄で主語が目的語とともに移動することが示される。また、状態の変化を表す副詞 (句) を伴って「(人を歩かせることによって) ある状態にいたらせる」の意がある。(小西1980『英語基本動詞辞典』, pp. 1696-1697)

このうち、「〈人〉が身を処する [生活する]」の意味で用いられる walk の用例については、補足的な説明として、それらが古風な用法であり、聖書に由来する宗教的色合いをもつことが述べら

<sup>4</sup> 後述するように、人の概念の比喩的拡張として理解できる無生物主語が walk と共起すること自体は少なくない。例えば、次の例では、多くの人から構成される集合的な列 (procession) が主語となっている。

(i) The endless procession walked by the church.  
(Declerck 1979: 568)

れているが、その実例は当然のことながらいずれも人が主語となっている (小西1980: 1697-1698)。

- (4) a. He walked in sorrow.  
(彼は悲嘆にくれる生活を送った)  
b. Let us walk in peace.  
(平和のうちを歩ませたまえ)

日本語訳として必ずしも「歩く」に対応しない場合でも、walk の用法においては、基本的に人 (もしくは人に類するもの) の活動であることが前提とされていることがわかる。

これらの先行研究や辞書・文法書の記述が示すように、動詞 walk に関しては、人 (もしくは動物やロボット、幽霊など人を模した解釈が容易なもの) との関連づけのない、真性の無生物が主語となる用例はほぼ皆無であるといつてよい。あえて作例を示せば、(5) のようなものになるだろうが、聞き手にあえて違和感を与えることを目的とした特殊な状況 (詩作など) でない限り、Chomsky の有名な 'Colorless green ideas sleep furiously.' と同様に、「文法的」ではあるが、「日常の言語使用」としては受け入れがたい表現である (非文の判断は、英語母語話者による)。

- (5) a. \*A strange habit has walked into me.  
b. \*The heatwave walked over the mainland of Japan.

以上のような言語事実の理解を前提に、次節では動詞 walk の主語にあえて無生物主語を用いる可能性について、生成 AI (ChatGPT) を用いた調査に基づく言語分析を示す。

### 3. 無生物主語と動詞 walk

生成 AI (ChatGPT) に、動詞 walk が無生物主語と用いられている例を提示してもらったのが (6) の例文であり (プロンプトは、Can you give me some examples of the verb "walk" used with

inanimate subjects? : アクセス日 : 2024年 5月31日), (7) がそれに付された補足説明である。<sup>5 6</sup>

- (6) a. **The storm walked** across the landscape, leaving a trail of destruction in its wake.
- b. **The shadows walked** along the walls as the candles flickered in the breeze.
- c. **The clock's hands walked** around the dial, marking the passage of time.
- d. **The flames walked** up the drapes, quickly consuming the fabric.
- e. **The fog walked** through the streets, obscuring everything in its path.
- f. **The river walked** through the valley, carving its way between the hills over centuries.

(7) In these examples, “walk” is used metaphorically to describe the movement or progression of natural elements, time, or phenomena as if they were moving deliberately.

(これらの例では walk が, 自然界のもの・時間・現象などの移動や進行の描写として, あたかも意図的な動きであるかのように比喩的に使われている。)

(6) の例文はあくまでも生成 AI による作例であるので, これをもとに, Google 検索で同様の名詞句と動詞 walk (ここでは過去形 walked) を組み合わせた実例を探したところ, ‘storm’, ‘shadows’, ‘river’ に関して実例が見つかったが, まず ‘shadows’ と ‘river’ の例について確認する (最終アクセス日 : 2024年 6月24日)。<sup>7</sup>

<sup>5</sup> 以下では, 例文における無生物主語と動詞 walk の部分を便宜上ボールド体で示す。必要に応じて付された日本語訳は, 記載のない限りすべて本稿執筆者による。

<sup>6</sup> (6) の例文に対する英語母語話者の判断は, (6b, c) は適格, (6d, f) は不可, (6a, e) はその中間で, 不可ではないが自然でもないというものであった。

<sup>7</sup> 検索結果からノイズ (検索目的に合わない事例) は排除した。例えば, ‘shadows’ や ‘storm’ には, 音楽グルー

(8) a. **Our shadows walked** with us around the Bay Trail near Yahoo HQ.

<<https://www.flickr.com/photos/pkingdesign/7095171059/>>

b. And **the shadows walked** across the orange cobble streets.

<<https://www.flickr.com/photos/ginairaultza/22481672337/>>

c. “The sky lay over the city like a map showing the strata of things and the big full moon toppled over in a furrow like the abandoned wheel of a gun carriage on a sunset field of battle and **the shadows walked** like cats and I looked into the white and ghostly interior of things and thought of you and I looked on their structural outsides and thought of you and was lonesome.”

<<https://www.goodreads.com/quotes/668879-the-sky-lay-over-the-city-like-a-map-showing>><sup>8</sup>

d. And **the river walked** with us.

<<https://celiahay.fr/And-the-River-walked-with-us>>

‘shadows’ に関しては, 複数の実例が見つかったが, 人の影と解釈できる例が大半を占める。(8a) は写真のキャプションであるが, 写真には脚を含めて地面に伸びる複数の人の影が写っており, 文字通り人の歩みとともにその影も「歩く」ように移動することを表していると考えられる。(8b) も同様に写真のキャプションであるが, 夕暮れの石を敷き詰めた街路を歩く人の姿が黒く影のよう

プヤスポーツ・チームの名称があるが, 人を集合的に捉えているだけであり, 本研究で意図する真正の無生物主語には該当しない。なお, ‘clock’s hands’, ‘flames’, ‘fog’ については, Google では該当する実例が確認できなかった。

<sup>8</sup> Jackson R. Bryer and Cathy W. Barks (Editors) (2003), *Dear Scott, Dearest Zelda: The Love Letters of F. Scott and Zelda Fitzgerald* (Bloomsbury Publishing) からの抜粋。

に写っており, 'the shadows' が人影を指しているとして理解できる。これらの例は, 実際の人の動きの反映としての影を見た描写であり, 常識的な範囲で「人」を拡張的に理解した walk の用例であるといえる。

(8c) は, 作家ゼルダ・フィツジェラルドが夫 (スコット) に宛てた私信 (1931年) の抜粋で, 手紙とはいえ非常に詩的な文体で書かれたものである。この 'shadows' が指すのは, おそらく夜空の満月にかかる雲のことだと推察される。ここでは, 脚を使って移動する動物を示す 'like cats' という直喩により, 無生物である 'shadows' を「歩く (walk)」という比喩表現として理解することは容易である。

'river' に関しては, 短編映像作品のタイトルとして (8d) の例があった。映像の内容は, おおむね川に沿って人が歩いていく姿を捉えたものであり, 動く主体の視点の換喩的転換による詩的表現といえるだろう。<sup>9</sup>

Google 検索で得られた実例で特に興味深いのは, 'storm walked' の検索でヒットした次の2件である。いずれも小説からの一節であるが, 文脈を理解するため, 前後の文章を含めて引用する (当該の文に下線を付す)。

(9) The storm walked into their small town on two legs in spiked, red patent leather heels.

She waltzed right through the main square, blond wig bouncing to the rhythm of her walk, a leopard print pocketbook slung over one shoulder, matching suitcases in each hand. Her eyes were covered with cat's-eye-shaped, white-rimmed glasses, mirrors to her soul, unavailable for view. A Lucky Strike hung from her red-painted lips.

<sup>9</sup> 4節でも同様の換喩的な拡張解釈の例として, 'path' や 'road' が walk の主語となる例文が生成 AI によって示されたことについて触れる。

<<https://thetandemcollective.com/community/blog/last-of-the-september-reads>>

(Bernice L. McFadden (2000/2021), *Sugar*)  
(その嵐 (the storm) は, 彼らが暮らす小さな町に, 爪先の尖った, 艶のある赤いハイヒールをはいた2本の脚で歩いてやってきた。ワルツを踊るような足取りで中央広場を通り抜けた彼女は, 金髪のかつらを歩調に合わせて揺らせながら, 肩にはヒョウ柄のハンドバック, 両手にはお揃いのスーツケースを持っていた。彼女の目を隠す猫目型の白フレームのサングラスが反射して, その魂を覗き込むことはできなかった。赤い口紅を塗った唇にはラッキーストライクが1本挟まっていた。)

(10) Sometimes he [= a wizard] would stop and throw his heavy staff into the air. It always came down pointing the same way and the wizard would sigh, pick it up, and continue his squelchy progress.

The storm walked around the hills on legs of lightning, shouting and grumbling.

<<https://www.terrypratchettbooks.com/read-an-extract-from-equal-rites/>>

(Terry Pratchett (2004), *Equal Rites*)

(彼 (=魔法使い) はときおり立ち止まり, 手にした重い杖を宙に放り投げた。落ちてきた杖は常に同じ方を指し, 彼はため息をついてはまたそれを拾い上げ, びしゃびしゃと音を立てながら歩みを進めるのであった。嵐雲は, 稲妻を脚のように伸ばし, やかましくゴロゴロと音を立てながら, 丘の辺りをゆっくりと進んでいった。)

(9) は, 小説の冒頭部であり, 主人公が町にやってくるという登場シーンである。第一文の主語 'the storm' は, 第二文では代名詞 'she' で置き換えられ, おそらくこれから「騒動」を起こすこと

になるであろう主人公について、いわば予告的に「嵐 (storm)」という比喩的表現で示しているのだと考えられる。(10) は、悪天候の中、魔法使いが丘陵地帯を歩いている場面である。この 'the storm' は文字通り嵐 (雲) であるが、動詞 walk はそのゆっくりとした進行を表している。

もっとも注目すべき点は、この両方の事例において、動詞の直後に 'legs' という表現が加えられていることである。(9) では、'on two legs in spiked, red patent leather heels' という表現で、主語が派手な靴を履いた脚で歩いていることを描写しており、第二文でその主語が代名詞 she で置き換えられる前に、'the storm' という名詞句が、実際には人間の女性を表す擬物法の表現であることを示唆している。つまり、第一文から第二文への展開において、「嵐」が人間であることへの理解を助ける方策として「脚」の描写が利用されているといえる。

一方、(10) では、稲妻 (lightning) を人間の脚に見立てて、雲間から稲妻が地上に向かって何度も落ちる様子を、擬人的に 'on legs of lightning' と描写している。この文で、仮にこの脚 (legs) に言及する表現がなかったとしたら、読者にはかなり奇異な印象を与えるのではないだろうか。なぜなら、「嵐 (the storm) が歩く (walk)」という主語と述語動詞の組み合わせは、「考え (ideas) が眠る (sleep)」のと同様に、慣用的な意味解釈にはそぐわないからである。ここでも、主語 storm と動詞 walk の組み合わせで自然な解釈を成立させるための方策として、脚 (legs) に言及する比喩表現が巧みに用いられているといえる。

この2つの事例において脚 (legs) の描写が加えられているのは偶然なのだろうか。これらの事例を「発見」した経緯をもう一度確認しておきたい。まず、動詞 walk が一般的に人以外の主語、いわゆる無生物主語を伴って使用されることは、意味論上の理由から非常に稀である。生成 AI を用いていわば無理やり作例を得た中で、'storm'

を主語とする数少ない事例が、Google 検索で得られたこの2つの事例であった。Google 検索によって捉えられる事例は現実には使用された英語テキストのごく一部分にすぎないことを認めた上でも、この2つの文がいずれも主語 storm の脚 (legs) についての明示的描写を含んでいるのは単なる偶然とは考えにくい。

この2つの事例がいずれも文学作品 (小説) の一節であることにも注目すべきである。一般に作家による文章は、Google 検索の対象となりうる膨大な英語テキストの中でもとりわけ細心の注意をもって意識的に語彙が選択され、文章が構成されていると考えられる。この2人の作家 (McFadden は米国, Pratchett は英国の作家) が、それぞれの作品で名詞 storm を動詞 walk と組み合わせる際に、同一の文中に legs の描写を加えるという創案にどれほどの必然性があるだろうか。この必然性はかなり高いというのが、本稿の主張である。

この2つの事例は、英語の walk という動詞には、脚を動かすことがつきものであるという意味論的な言語知識、言い換えれば、「2本の脚を交互に動かして移動する」という中核的な意味/イメージが切り離しがたく結びついていることの反映である。英語話者にとってこの知識は必ずしも明示的に意識されるものではないかもしれないが、潜在知識としては確実に存在すると考えられる。通常はありえない一見逸脱的な主語と述語動詞の組み合わせを無理なく解釈させるための創意として、2人の作家はそれぞれに研ぎ澄まされた言語直感に従い、読者の気を惹く印象的な場面の描写を作り出すことに成功したといえるだろう。

Ritter and Rosen (1996) が非文として挙げていた (2b) の例文について、もう一度考えてみよう ((11) として再掲)。

(11)\*Tears walked down the child's face.

(Ritter and Rosen 1996: 39)

この文は、確かに単独の文として目にするとは非常に違和感のある表現であるが、アニメーションやマンガの中で、「涙 (tears)」が擬人化されて2本の脚を交互に動かし、頬を降りてくるという場面の描写であるとすれば、問題なく容認できるというのが英語母語話者の判断である。先に見た2つの事例における 'the storm walked' の描写は、小説という文字情報だけに依存するテキスト・メディアの表現であったがために、自然な解釈を成立させるためには「脚 (legs)」という付加的な具体イメージの補完が必要とされた。一方、戯画化された視覚表現であるアニメーションやマンガの場面という具体的な参照先があれば、必ずしも 'legs' という文字情報により無生物主語の擬人的解釈を誘導する必要はないのである。<sup>10</sup>

以上の議論が示唆するのは、動詞 walk の語彙意味として英語母語話者の言語知識には、「(典型的に) 脚を交互に動かして移動する」という確立された意味/イメージがあり、それが使用上の制約として機能しているということである。すでにこのことは Ritter & Rosen (1996) や辞書類の記述においても多かれ少なかれ指摘されていることであり、この結論自体は驚くべき内容ではないかもしれない。しかし、本稿の指摘の意義は、Google 検索における2件の非常に稀な創造的事例に共通する表現上の特徴から、母語話者の言語知識としての walk の語彙意味のありようを別の角度から実証する可能性を示したことである。

繰り返しになるが、動詞 walk に関するこの2つの創造的といえる事例の「発見」は、生成 AI の利用によってなされたものである。すなわち、生成 AI が出力として提示する潜在的に可能な例文をヒントに、事例を Web 検索で確認し、それらを精査することで、特定の語や表現の文法的・意味的特性を明らかにするという調査方法の実践

<sup>10</sup> 関連して、査読者からの示唆に基づき、(2b/11) の例文に 'on tiny legs' を加えた (i) について母語話者の判断を求めたところ、完全ではないが元の例文よりも容認度が上がるとのことであった。

(i) Tears walked on tiny legs down the child's face.

例である。もちろん、このような調査を行う前提として、調査対象の語や表現の一般的な文法的・意味的特性をあらかじめ把握した上で、その境界的な文例を AI に生成させるということが必要になる。次節では、生成 AI によって提示された 'storm' 以外の名詞の使用例から、いくつか分析に値すると思われる事例についてさらに検討する。

#### 4. その他の境界的事例と動詞 walk の意味論

生成 AI によって挙げられた作例に含まれる特定の表現 (語と語の組み合わせ) は、実は通常の Web 検索 (Google 検索やコーパス検索など) では事例が見つからないことも多い。2024年5月31日時点での ChatGPT による無生物主語と walk の用例には、'the clock's hands', 'the flames', 'the fog' という名詞句表現が含まれていたが、Google 検索では、無生物主語の実例と確定できるものはなかった。<sup>11</sup>

今回改めて ChatGPT に加え、Claude と Gemini を使って同様のプロンプトを用いて調査をしたところ、次のような無生物主語が動詞 walk の主語となる例文が示された。(12) は、生成 AI ごとに提示された主語名詞句のみをリストアップしたものである (最終アクセス: 2025年6月20日)。<sup>12</sup>

- (12) a. ChatGPT による作例から: the boots, the old house, the shadows, that robot, the doll, the vase, my paycheck, the camera, the melody  
b. Gemini による作例から: the path, the old road, the clock's hands, the narrative, the discussion, the camera, the virtual

<sup>11</sup> Web 検索で事例がヒットしないからといって、事例が存在しないというわけではない。デジタル化されていないテキストや、デジタル化されていても通常の検索の網にかからないテキストが存在するのは当然である。生成 AI が例文として提示するものは、事例そのものではなくても、語句の選択や組み合わせに関してそれに類似した事例を間接的に参照しているものと推察できる。

<sup>12</sup> これら無生物主語に関して、Google 検索で walk との組み合わせの実例を探してみたが、確認できたものはごく少数にとどまる。

sunlight

c. Claude による 作例から: the robot, the storm, shadows, my wallet, the tools, the cookies, the fence posts, the building's foundation, the colors of the painting, the excavator, the program, the melody, the story, the disease

3 節で取り上げた 'shadows' と同様に、本来的に人間の形態を模した 'robot' や 'doll', 'boots' や 'path/road' という人間の歩行移動を前提とした換喩的解釈により、容易に人間の脚/足との連想ができるものが多い。ChatGPT と Gemini の両方が挙げた 'camera' も、移動する撮影者の視点とカメラが同期するという意味で、換喩的拡張として分析できる。また、人間の活動の反映として、身体移動だけではなく、精神活動の進行を捉える用例としては、'narrative/discussion/story' などが潜在的な実例としてあるのかもしれない。以下では、境界的な事例という観点から、この中から 2 つの興味深い組み合わせパターンについて考察してみたい。

1 つ目は、(13) の ChatGPT と Claude の両方で示唆された 'melody' の例である。(14) は、'melody walks' を Google で検索した結果見つかった実例 (音楽のレビュー) である。<sup>13</sup>

(13) a. **The melody walks** a fine line between sorrow and hope. (ChatGPT)

b. **The melody walked** up the scale. (Claude)

(14) Really well structured and surprising track. **The chorus melody walks** the fine line between killer hook and cluttering the song, but there's no doubting the talent behind what is a top first upload.

<sup>13</sup> (14) では、(13a) と同様に walk の目的語として '(a/the) fine line between ...' という表現が後続しており、AI がこの例を参照した可能性も考えられる。Google 検索では、他にも曲名として 'Melody walks through the door' や 'Melody walks in beauty' などが確認できた。

<<https://www.abc.net.au/triplejuneearthed/review/68c5fdd8-9b2c-5561-90f9-c8b6fa878a8c/>>

無生物主語 'melody' が walk の主語として容認されうるとすれば、その背景には、音楽のメロディが音階に沿って上下運動をするものであるという一般的な理解が背景にあると考えられる。メロディは、譜面上でも音符の上下運動として表記され、さらに、音符自体の視覚イメージが、五線譜を階段 (道) に見立てた脚の動きを容易に想起させるということもある。また、音楽が時間進行に従い、多くの場合ほぼ一定したリズムで一方向に進むという世界知識も、メロディという概念を人の一般的な歩行運動に重ねる上でふさわしい条件といえるだろう。つまり、'melody' という無生物主語は、直接に「歩行」との意味的関連はないものの、音符というメロディを表す記号の文化慣習的な視覚と運動のイメージに基づいた比喩的理解に支えられ、動詞 walk との共起関係が比較的成立しやすいのではないかと考えられる。<sup>14</sup>

もう 1 つの興味深いパターンは、ある種のユーモア表現として解される、人間の歩行運動には直接は結びつきにくい一連の名詞群を用いた (15) のような例である。<sup>15</sup>

<sup>14</sup> 視覚イメージによる補完については、(11) の容認性をめぐるアニメーションやマンガの議論も参照されたい。

<sup>15</sup> これらの例は生成 AI による作例であるが、英語母語話者による判断はいずれもユーモラスな表現として容認可能とのことである。ここでは潜在的に可能な言語表現と仮定して議論を進める。なお、Google 検索で得られた関連する (かもしれない) 同じ名詞句を用いた実例は以下の 4 例であるが、文脈や解釈が十分に特定できなかったため、ここでは参考のため提示するのみにとどめる (最終アクセス: 2025年6月26日)。

- (i) a. Recently some of my hot tools walked away, <[https://www.instagram.com/southernbelle\\_bymarianoelteam/reel/DD-cmxCytib/](https://www.instagram.com/southernbelle_bymarianoelteam/reel/DD-cmxCytib/)> (インスタグラムの写真に付されたテキスト)
- b. The cookies that walked down her Throat (絵本のタイトル) <<https://www.amazon.com/cookies-that-walk-down-Throat/dp/BOCDNC7TT3>>
- c. Yesterday, a vase walked across the mantelpiece. A friend and I have traced the fault line along a map. It is very close. (地震の翌日の部屋の中の描写)

- (15) a. **My wallet walked** away when I wasn't looking. (Claude)

(目を離れたすきに財布がどこかに行ってしまった。=財布を盗まれた。)

- b. **The tools seem to walk** off the construction site regularly. (Claude)

(工事現場から工具がよくどこかに行ってしまうようだ。=誰かが盗んでいるに違いない。)

- c. **The cookies walked** right out of the jar. (Claude)

(クッキーがあっという間に瓶からいなくなったね。=誰かがこっそり食べたんじゃないの?)

- d. **That vase didn't disappear — it must have walked** away! (ChatGPT)

(あの花瓶がなくなるはずがない。きっと(脚が生えて)どこかに歩いていったんだ。)

- e. **My paycheck walked** out the door before I even saw it. (ChatGPT)

(目にする前に給料がドアから出て行ってしまった。=あっというまになくなった。)

これらの例文では、動詞 walk に away, off, out of という不変化詞や前置詞句が後続し、無生物主語がその場から「(なぜか)なくなる」「盗まれる」という意味を表すという共通点がある。いずれも無生物主語が文字通りに歩き去るわけではなく、話し手の視点から想定外の出来事(モノの遺失や紛失、消滅など)に対する否定的評価が、多くの場合自嘲的ユーモアを込めて表現されると考えられる。本来歩くわけがないモノが、い

わば戯画化されたユーモアとして「歩いて (walk) 行ってしまおう」と表現されているのである。

これらの例に共通する解釈から、このグループは、〈無生物主語 + walk + away/off/out of ...〉という形式でイディオム化された構文的表現であることが示唆される。句動詞としての walk away/off/out には、怒りや不満の結果としての行為など、否定的評価を伴う場面描写への偏りが認められるのは確かであるが(マケーレブ・マケーレブ2006, 安藤2014, バーナード2025などを参照)、人が主語になる場合には常に否定的含意を伴うわけではない (e.g. She walked out of the door)。また、(15) の無生物主語との組み合わせでは、単に状況の否定的評価だけでなく、「気づかなかった自分が馬鹿だった」というような自嘲的なユーモアを伴う発話として解釈できる特徴があると思われる。ただし、このような無生物主語と walk の組み合わせが、モノの遺失・紛失・消滅に関する否定的評価をユーモラスに表現する言い回しであると明記した辞書類は、管見の限り存在しないようである。<sup>16</sup>生成 AI が出力した作例のみに基づく議論であるので、現時点で確定的な結論を出すことはできないが、当該パターンのイディオム性についての詳しい検討は今後の課題としたい。

## 5. おわりに

無生物主語を伴う動詞 walk の文表現は、事例数自体は非常に限られているが、その大半は世界知識の理解に基づく換喩や擬人法によって比較的容易に「歩く人」に関連づけられるものである。一方で、単なる世界知識による比喩的理解が及びにくいところでは、3節で検討した 'storm' の例

<sup>16</sup> 小西 (1980) には、モノが walk の主語となる例として1つだけ次の例文が挙げられている。

(i) He typed so hard that the lamp walked right off the desk. (小西1980: 1699)

引用元は *The Random House Dictionary of the English Language* (College Edition) の1968年版であるが、『小学館ランダムハウス英和大辞典第2版』(1994)にも同じ例文が掲載されており、日本語訳は「彼がタイプをあまりに強く打ったので電気スタンドが机からずり落ちた」となっている。この例は状況に応じてユーモアと解することは可能であると思われる。

<[https://anotherhand.livejournal.com/87413.html?>](https://anotherhand.livejournal.com/87413.html?)

d. My Medium paycheck walked home. (エッセイのタイトル; Medium はネットバンク・アプリの名称)

<<https://medium.com/the-humor-pub/my-medium-paycheck-walked-home-6cafb88aa681>>

のように、場面に限定されるかたちで、主語と動詞との非慣用的な組み合わせを自然に解釈させるため、動詞 walk の語彙的意味の中核にある脚 (の動き) のイメージが、おそらく不可欠な要素として、文中の付随的表現により補完されていることを指摘した。このような境界的な創造的表現の存在は、はからずも英語話者の言語知識における動詞 walk の語彙的意味制約の本質を指し示すとともに、創造的な言語表現が成立するしくみの一端を明らかにしていると考えられる。

本稿で行ったような生成 AI を利用した調査・分析の方法は、文法論や意味論のみならず、文体論なども含めて、広く言語研究に波及する影響があると考えられる。インターネットや大規模コーパスを活用した言語研究はすでに数十年の歴史があるが、言語学的関心から研究者が求める特徴を備えた未知の実例をピンポイントで見つけ出すことは必ずしも簡単ではない。生成 AI の登場により、事後的な実例の確認を含めて間接的な手法ではあるが、潜在していた興味深い実例 (の一部) を発見しやすい環境が整ってきたといえる。

しかし、その一方で、生成 AI によって提示されたものの、実例が一般的なテキストのみならず、Google やコーパスでの検索でも見つけられないような事例の正当性を言語データとしてどう扱うべきかというやっかいな方法論上の課題も新たに浮上してきた。例えば、4 節の最後に取り上げた自嘲的ユーモアを伴う無生物主語と 'walk' のイディオムの用法の実在性はどの程度確かだといえるだろうか。言語テキストのデータベースとして、インターネットとともにさまざまな大規模コーパスの構築と整備が進んだこの30年ほどの言語研究の流れの中で、従来の母語話者の内省判断 (直感) だけに依存するのではない、より「客観的」な言語データの活用が謳われ、言語事実に関する多面的な裏づけが求められるようになってきている。しかし、いわば逆説的に、生成 AI の到来とともに言語学における母語話者の内省判断が必須となる場面が再び新たに登場してきたともいえる。そ

の一方で、とりわけ英語のように世界規模で膨大な流通量のある言語に関して、そもそもこれだけ質的にも多種多様な言語データが顕在化するようになった現代の言語使用状況の下で、従来の「母語話者による内省判断」という方法論上の手法の自明性は、その概念的基盤が再度検証されるべき段階にあるようにも思える。言語に内在する慣用性と創造性のはざまに光を当てる新たな言語研究の視座が求められているといえるだろう。

謝辞 同僚の Mark Irwin 氏には英語母語話者として例文の判断や解釈について貴重な情報提供をいただいた。また、本稿の査読者には内容を改善する上で有益な示唆をいただいた。ここに記して感謝申し上げる。本研究は、JSPS 科研費 24K039595 の助成を受けている。

## 参考文献

- 安藤貞雄 (編) (2014) 『クラウン英語句動詞辞典』三省堂, 東京.
- バーナード, クリストファ (2025) 『英語句動詞分類辞典』研究社, 東京.
- Declerck, Renaat (1979) "Aspect and the Bounded/Unbounded (Telic/Atelic) Distinction," *Linguistics* 17, 761-794.
- Huddleston, Rodney and Geoffrey Pullum (2002) *The Cambridge Grammar of the English Language*, Cambridge University Press, Cambridge.
- 小西友七 (編) (1980) 『英語基本動詞辞典』研究社出版, 東京.
- Levin, Beth and Malka Rappaport Hovav (2005) *Argument Realization*, Cambridge University Press, Cambridge.
- マケーレブ, ジャン・マケーレブ恒子 (2006) 『動詞を使いこなすための英和活用辞典』朝日出版社, 東京.
- Quirk, Randolph, Sidney Greenbaum, Geoffrey Leech, and Jan Svartvik (1985) *A*

無生物主語が「歩く (walk)」とき - 生成 AI を利用した境界的事例における動詞意味論へのアプローチ (鈴木 亨)

*Comprehensive Grammar of the English Language*, Longman, London.

Ritter, Elizabeth and Sara Tomas Rosen (1996)

“Strong and Weak Predicates: Reducing the

Lexical Burden,” *Linguistic Analysis* 26, 29-62.

『小学館ランダムハウス英和大辞典 (第2版)』

(1994) 小学館, 東京.

## When Inanimate Subjects ‘Walk’ — Exploring Borderline Cases in Verb Semantics with the Aid of Generative AI

SUZUKI Toru

This article examines borderline cases in verb semantics using generative AI and internet search, focusing on the verb *walk* when paired with inanimate subjects. Typically associated with human activity, *walk* resists nonhuman subjects due to their semantic grounding in human physical properties. However, this resistance can be mitigated in literary and imaginative contexts through mechanisms such as personification and metonymy. Even so, such borderline examples remain rare, precisely because they are, by nature, unexpected.

This study discusses how some instances of *walk* with inanimate subjects are easily interpretable through world knowledge, while others are more elusive. Two particularly striking examples involving the subject *storm*, identified through Google search aided by generative AI, demonstrate that reference to ‘legs’ is crucial for natural interpretation. This in turn suggests that *walk* encodes implicit requirement for bipedal motion in a human-like manner within its lexical semantics. Another case highlights the idiomatic use of *walk* with an inanimate subject to humorously convey the notion of ‘unnoticed loss.’

As a pilot study, this exploration of previously undocumented borderline cases in verb semantics illustrates the potential of generative AI in shedding new light on the creative and flexible nature of human language.